

Title	ピエール・ブルデューの「場」の理論とメディアの社会学
Author(s)	藤田, 智博
Citation	年報人間科学. 28 P.117-P.122
Issue Date	2007
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/3874
DOI	10.18910/3874
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

◇書評◇

ピエール・ブルデューの「場」の理論とメディアの社会学

Rodney Benson & Erik Neveu (eds.)
Bourdieu and the Journalistic Field

Polity Press, 2005

藤田智博

ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の名を、メディアの社会学において見かけることはあまりない。しかしここで、メディアの社会学というのはいささか正確ではない。むしろ、メディア論という方がわかりやすいだろう。というのも、メディア「論」やコミュニケーション「論」の研究が数多く存在する中、メディアの「社会学」はその位置づけも明確でなく、それを意識した研究も進んでいないからである。しかし、近年、メディア論やコミュニケーション論において「社会学独自の役割」^①を明確にしようとする動向がうかがえ、その際に、ブルデューの名が注目されている^②。メディア論における社会学の貢献を明確にするためにブルデューに注目している社会学者にロドニー・ベンソン (Rodney Benson) の名が挙げられるが、そのベンソンが、編者の一人として二〇〇五年に刊行したのが、本稿でこれから紹介しようとする論集『ブルデューとジャーナリズム界』(Bourdieu and the Journalistic Field) である。

ブルデューの名がメディア論において浮上していることの「きっかけ」は、ブルデューが九六年に発表した『テレビジョンについて』(Sur la télévision) に求められる。また、それが英語圏をはじめ広範に紹介されたことも大きい^③。『テレビジョンについて』(以下『テレビジョン』) は、ブルデュー自身によるテレビ講演を収録しており、そこでブルデューは、フランスのジャーナリズム内外に働いている力関係を分析し、商業的なものの比重が増したフランスのジャーナリズムの構造的問題を浮き彫りにした。その際ブルデューは、ジャーナリズム「界」という概念を分析の中心概念として用い、それによ

てメディアへの社会学的アプローチの可能性を示唆した。しかし、『テレビジョン』は、一般のテレビ視聴者にも向けられているためこの概念が実際の研究にどのように役立つのか曖昧な点も多い。ここで書評される本書『ブルデューとジャーナリズム界』は、ブルデューの考えを深化させ、理論と事例双方から、その概念の意義・有効性を明らかにしようと試みている。この書評では、フランスの事例から編み出されたその概念が日本の状況においても「使える」のかどうかを念頭に置きつつ、編者らが「進行中の仕事」と呼ぶ本書の試みを紹介したい。以下では、本書の背景的な研究にも言及しつつ、本書の内容を見ていくことにする。しかしその前に、ジャーナリズム「界」という概念がブルデューの学説上においてどのように位置づけられるかについて簡単に言及しておくことにしよう。

ブルデューの学説になじみがある方は、「界」(*champ, field*)という概念・理論に、これまでのブルデュー理論との相同を見出されるだろう。「界」、あるいは「場」という概念は、「文化資本」、「ハビトゥス」といった概念ともに、ブルデューの学説を理解する鍵語である。ここでは、デヴィッド・シュワルツ(David Swartz)による解説を引用してみよう。

界は、商品、サービス、知識、もしくは地位の、また、こうしたさまざまな種類の資本を蓄積したり独占したりする闘争において、行為者によって保持される競争的位置の生産、循環、領有の舞台を意味している。界は、特定の種類の資本または資本

の結びつきの周りに組織化される構造化された空間として考えられるかもしれない^④。

この引用ではわかりにくいかもしれない。これに続けてシュワルツが引いている例で説明するならば、たとえば、「知識人界」は、芸術家、作家、研究者といった「象徴」の生産に従事している者が、象徴資本を求めて競争する制度、組織、市場の基盤として特徴づけられる^⑤。「界」理論によれば、科学も、ある「界」、「場」の枠組の中で生産される。それは、科学的知識も権力関係を介在させた「闘争」「競争」の中で生産されることを意味する^⑥。

ここで問題になってくるのは、「界」理論が、なぜ「メディア」や「ジャーナリズム」に適用されるのか、という点であろう。ブルデューはこれまで「界」「場」の理論を援用し、宗教、文学、大学などさまざまな「界」「場」に社会学的分析を施してきた^⑦。「界」理論のメディアやジャーナリズムへの適用がそれらの研究と連続していることは明らかである。しかしその一方で、九三年の『世界の悲惨』(*La Misère du monde*)の刊行を機にブルデューが政治的介入を強めていったことはよく知られており^⑧、九六年の『テレビジョン』からは政治に傾倒していくブルデューの軌跡を読み取ることができる。つまり、ブルデューの学説における「政治」を主題化するフィールドが、「メディア」や「ジャーナリズム」にはあるように思える。もちろん、それについて検討するのはこの書評の射程を超える。しかしその点、つまり「ブルデューにおける『政治』」^⑨と

いう主題をまったく無視して、ジャーナリズム「界」という概念を用いることもできないのではないだろうか。この書評では、「ブルデューにおける『政治』」を主題化するフィールドとしての「メディア」という観点からも、本書の内容を見ていくことにしたい。

本書は、以下に示すように「はじめに」をのぞき、大きく三部から構成され、十二本の論文が収められている。各章の執筆者とともに本書の目次を示しておこう。まず、一章「はじめに―進行中の仕事としての界理論」R・ベンソン、E・ネヴェュー (Erik Neveu)。

第一部「理論的志向」には、二章「政治界、社会科学界、ジャーナリズム界」P・ブルデュー、三章「二重の依存性―政治と市場の間のジャーナリズム界」P・シャンパーニュ (Patrick Champagne)、四章「専門化されたジャーナリズムのサブフィールド」D・マルケッティ (Dominique Marchetti) の三論文が置かれている。

第二部「比較の視野」は、五章「フィールド・バリエーションのマッピング―フランスとアメリカのジャーナリズム」R・ベンソン、六章「感染血液のスキヤンダルー医療ニュースの再粹組化」P・シャンパーニュ、D・マルケッティ、七章「フランスの経済ジャーナリズム」J・デュバル (Julien Duvau)、八章「政治的秩序のメディアア神聖化」E・ダラス (Erik Daras)、九章「ジャーナリズム界への流入―ユース・アクティヴィズムとメディア公正運動」E・クラインベルグ (Erik Klinenberg) の五論文である。

第三部「批判的反射」は、十章「ブルデュー、フランクフルト学派、カルチュラル・スタディーズ―いくつかの誤解について」E・

ネヴェュー、十一章「何からの自律？」M・シャドソン (Michael Schudson)、十二章「界理論、分化理論、比較メディア研究」D・ハリン (Daniel C. Hallin) の三論文である。

まず、二章の、ブルデューの未英訳講演「政治界、社会科学界、ジャーナリズム界」は、ジャーナリズム「界」という概念について知るのに最適と言えるだろう。ここでは、テレビに代表されるジャーナリズム「界」が、他の「界」を侵食していることが確認される。経済資本に左右されやすく「自律性」を欠いたジャーナリズム「界」でありながら、分析の際には、その「界」内部で独自に働いている力関係を考慮に入れる必要性が述べられる。シャンパーニュによる三章も、ジャーナリズム「界」の理論的側面に照準している。それによれば、ジャーナリズム「界」は、政治的もしくは経済的制約にさらされ、自律性を模索しようとするジャーナリストの行動は、国家もしくは市場によって制限されるのが常だとされる。シャンパーニュによれば、フランスジャーナリズム「界」の歴史は自律性の獲得をめぐる闘争の歴史でもあるものの、その闘争は政治的・経済的限界に突き当たるのである。

二章から四章が「界」理論の理論的側面を掘り取っているとすると、五章から九章までは、「界」理論の有効性を示す事例研究になっている。ここでは、そのうち代表的なものとして、五章と六章を紹介しよう。編者の一人であるベンソンによる五章は、フランスの事例から編み出されたジャーナリズム「界」という概念の「普遍的」な性格に着目し、フランスとアメリカにおけるジャーナリズムの比

較を行っている。ベンソンは、経済的圧力、政治「界」からの影響、ジャーナリズムの歴史的形成、形態的・人口統計的要因の四つの観点から仏米のジャーナリズムの相違を検討している。そして、両国のジャーナリズムの相違が、外的な経済的影響よりもむしろ、政治的（国家的）・構造的・歴史的要因にあることを明らかにすること、**「界」理論の有効性を提示している。**マルケッティとシャンパーニュによる第六章は、「社会問題」の社会学への「界」理論の貢献を示唆している。80年代半ば、またHIVウイルスが同定される以前、フランスの数千人の血友病患者にHIVウイルスに感染した血液が配布された。それをきっかけにして起こった「スキヤンダル」を事例に、「社会問題」の構築へのジャーナリズムの影響、さらには「社会問題」の定義の変化とジャーナリズム内部のダイナミズムが相関していることを明らかにしている。

十章以降の第三部は、「界」理論の意義をその他の諸理論との関係から提示しているが、ここでは十章を取り上げよう。ネヴェューによる十章は、ブルデューをフランクフルト学派の後継に仕立て上げる議論、また、ブルデューをカルチュラル・スタディーズと同等視する議論を検討し、そうしたブルデューの捉え方が誤解だとした上で、そのような誤解が生じる原因をブルデューの研究史を振り返りながら追跡している。ネヴェューによれば、「メディアに操作されやすい大衆」というフランクフルト学派の図式、また、カルチュラル・スタディーズの「反ディシプリン」の実践、そのどちらともブルデューの立場は異なる。

以上が本書の概観である。本書は、論集という性格もあってか、「寄せ集め」という性格を拭い去れないかもしれない。しかしそれでも、本書を貫く問題意識、また寄稿者の多くに共通する論点を指摘することができる。第一に、本稿の冒頭でも触れたように、メディア論、コミュニケーション論における「社会学の役割」を明確化しようとする企図であり、第二に、ジャーナリズムが市場の要請にまます従属しているという歴史的な視点である。第二の点に関しては、ブルデューの学説における「政治」という主題と関わっている。メディア論における社会学独自の貢献とはどのようなものだろうか。たとえば、本書一章の「はじめに」では編者のベンソンとネヴェューによって、ブルデューの理論が、ハーバマスの「公共圏」という概念より経験的研究に応用しやすいことが指摘されている。ハーバマスの「公共圏」概念は、メディア論においてポピュラーであるが、社会学的な経験的研究に適しているとは言いがたい。では、経験的研究に適しているという点のみが、メディア論へのブルデュー理論の「社会的貢献」なのだろうか。

たとえば、同じく「はじめに」では、編者のベンソンとネヴェューによって、ブルデューの理論が、フランクフルト学派、ヘゲモニー論、政治経済学のいずれとも異なり、アメリカの「新制度派」(new institutionalism)と多くを共有する理論として位置づけられている。彼らによれば、「新制度派」とは「現代社会が多くの競争的で半自律的な制度的秩序もしくは場から構成されている」⁽⁹⁾と考える立場であるため、「社会」を説明するために、そのような

制度、たとえばジャーナリズムに焦点を当てようとする。しかし、ブルデューの理論が新制度派と重なるならば、わざわざそれを持ち出す必要も無いはずである。では、ブルデューの理論にいかなる意義を見出せるのだろうか。

それはおそらく、メディアを「従属変数」とする図式を反転させようとする企図、くわえて「界」内外で作用する権力を強調する点にある。メディアを「従属変数」とする図式はこれまでの支配的なメディア論が踏襲してきた図式であるが、それに対し、ブルデューの理論は、メディアを「独立変数」とする手段を提供する⁽¹⁾。つまり、メディア「を」説明するのではなく、メディア「で」説明するところに、メディア論への社会学アプローチとしてのブルデュー理論の意義がある。また、「新制度派」と比べて、ブルデューの理論が権力の作用を強調する点も重要である。「界」が、さまざまな種類の資本の周りに組織され、「界」内部で、「象徴」資本などさまざまな資本を求め競争的な関係が築かれることはすでに見たとおりである。本書第六章は、ジャーナリズム「界」内部に働く力関係が、「社会問題」の構築に相関していることを実証しているが、これこそ、ジャーナリズム内部の権力を「独立変数」とし、ジャーナリズム「界」概念を用いたメディアの社会学的研究として、評価できる。

続いて二つ目の、ジャーナリズムが市場の要請にますます従属しているという歴史的視点の重要性について触れておこう。本書の「はじめに」他、多くの章で言及されているが、ジャーナリズムを

問題にしなければならぬ背景に、フランスのもっとも大きなテレビ局の民営化（八六年）や、北アメリカ、イギリス、オーストラリアといった地域におけるその余波が指摘できる。つまり、ジャーナリズムへの経済的圧力がますます大きくなっており、ジャーナリズムの自律性が脅かされているのである。もちろん、本書第三章でジャンパーニュが述べているように、経済界の圧力は、ジャーナリズムの萌芽期から、つまり19世紀末からすでにうかがえた。しかし問題は、その「程度」にある。『テレビジョン』においてブルデューは、二つの「幻想」を戒めた。一つは、ある現象に向かい合ったときに、「これまでと何も変わっていない、いつも同じだ」という幻想を持つことであり、もう一つは逆に、「まったく新しい、一度も見ることがない」という幻想を持つことである⁽²⁾。「いま」、ジャーナリズムを問題にしなければならないのは、現代社会に極めて大きな影響力を持つジャーナリズムが、それまでとは類似しているけれどもどこか異なる事態に直面しているからである。本書のいくつかの章で触れられているように、ジャーナリズム「界」という概念は、そのような歴史的変化の考慮を可能にする概念であり、その点に、ブルデュー理論の利点がある。

〈注〉

- (1) Michael Schudson, "The Place of Sociology in the Study of Political Communication", *Political Communication* 21(3), 2004, p.271.
- (2) 一例を以下に示しておく。Rodney Benson, "Field Theory in Compara-

ive Context: A New Paradigm for Media Studies", *Theory and Society*

28(3), 1999, pp. 463-98, Philip Marlière, "The Impact of Market Journal-

ism: Pierre Bourdieu on the Media", *Sociological Review Monograph*

48(2), 2000, pp.199-211, Nick Couldry, "Media Meta-Capital: Extending

the Range of Bourdieu's Field Theory", *Theory & Society* 32(5), 2003,

pp.653-77, Rodney Benson, "Bringing the Sociology of Media Back In",

Political Communication 21(3), 2004, pp.275-292, David Hesmondhalgh,

"Bourdieu, the Media and Cultural Production", *Media Culture & Society*

28(2), 2006, pp.211-231 なぐさみあゆみ。

(3) 『テレビジョンについて』は二五ヶ国語以上に翻訳されている。こ

の点は、Rodney Benson & Erik Neveu (eds.), *Bourdieu and the*

Journalistic Field, 2005, Cambridge: Polity Press, p.195 参照。英語の

翻訳は九八年に、日本語の翻訳は、二〇〇〇年に出版されている。

日本語版は、ビエール・ブルデュー (櫻本陽一訳)『メディア批判』

二〇〇〇年、藤原書店。

(4) David Swartz, *Culture & Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*,

1997, Chicago & London: The University of Chicago Press, p.117.

「界」理論を、ブルデューの社会学論上ではなく、さらに幅広い文

脈から位置づけたものとして、John Levi Martin, "What Is Field

Theory?" *American Journal of Sociology* 109(1), 2003, pp.1-49.

(5) David Swartz, *Culture & Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*,

1997, Chicago & London: The University of Chicago Press, p.117-8.

(6) ブルデューの「界」理論と科学との関係を扱ったものとしては、金

森修「場の自律性と社会学」宮島喬、石井洋二郎編『文化の権力―

反射するブルデュー』二〇〇三年、藤原書店、一六三―一八七頁を参

照されたい。

(7) ブルデューの「界」理論と文学や芸術の生産の関係を扱ったものと

しては、鈴木智之「作品の科学はいかにして可能となるか」P・ブ

ルデューにおける『文化的生産の場』の理論をめぐって―』『社会学

評論』一九九六、一七―一八五頁を参照されたい。

(8) 宮島 喬、石井洋二郎編『文化の権力―反射するブルデュー』二〇

〇三年、藤原書店、一五頁。

(9) 前掲書、一五頁。

(10) Rodney Benson & Erik Neveu (eds.), *Bourdieu and the Journalistic*

Field, 2005, Cambridge: Polity Press, p.11.

(11) この点は、Rodney Benson, "Bringing the Sociology of Media Back

In", *Political Communication* 21(3), 2004, p.276 を参照。

(12) ビエール・ブルデュー (櫻本陽一訳)『メディア批判』二〇〇〇年、

藤原書店、七五―八頁。